２０２１年度　長期・中期研修報告書

所属　文学部　　職名　教授

氏名　吉田幹生

＜研 修 概 要＞

2021 年 4 月 1 日から 2022 年 3 月 31 日まで、東京大学の高木和子教授に受け入れ先を提供していただき、「『源氏物語』の研究」と題する研究を行った。『源氏物語』は千年の長きにわたって読み継がれてきた作品であり、そのため研究史の蓄積も厚い。しかし、過去の小さな誤読が検証されないまま通説化しているなど、いまなお、基本的なところで解釈を更新すべき点があるように思われる。それゆえ、本研修では、いわゆる第一部を中心に通説の再検討を行った。

前期は、賢木巻および澪標巻に見られる藤壺の出家と中宮位の関係について検討した。1980 年代頃から、中宮位と出家とは連動せず、たとえ出家したとしても中宮位から離れるわけではないことが明らかにされてきたが、では、賢木巻で藤壺が出家を決意したさい自身の中宮位についてどのように考えていたのか、また澪標巻で冷泉が即位した後の藤壺はいかなる立場にあったのか。本研究では、従来説の問題点を検証すると同時に、助詞「も」の働きや「位をあらたむ」と言った場合の「位」の意味するところについて考え直すところから、この問題について新たな解釈を提示することを試みた。この新解釈については、7 月に学内の研究会で報告し、そこで提出された質問や意見を組み込む形で再検討し、『国語国文』12 月号に「藤壺の出家と中宮位」として発表した。

後期は、絵合巻の光源氏が体現する価値観の問題について検討した。澪標巻以降の光源氏については策謀家として捉える意見が通説化しているが、それだけでは、『竹取物語』や『伊勢物語』を絵合の場に提出したことの説明がつかない。そこで、権勢志向の権中納言とは異なる価値観を体現している存在として光源氏を捉える方向を模索した。具体的には、権謀術数を張りめぐらして権力を獲得しようとする姿勢はむしろ権中納言に担わせられており、光源氏には、それとは対極にある、弱者や敗者への共感が抱え込まされていると分析した。そして、両者が体現する価値観は当時の政治理念の反映ではないかと考えることで、絵合巻の問題を当時の政治問題に結び付ける可能性を提示した。この解釈については、2022 年 3 月刊行の『成蹊国文』55 号に「絵合巻の光源氏」として発表した。

以上が研修概要であるが、当初の予定よりも歩みが遅いことは否めない。研修そのものは 3 月 31 日で終了したが、引き続き『源氏物語』再検討の作業は継続していきたい。